

槐

かい

岡井省二創刊

平成17年4月号

平成十七年四月一日発行 第十五巻第四号 通巻第一六六号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



密印

高橋将夫

太陽のコロナを思ふ寒さかな
このままがいいと言ひたる海鼠かな
赤鬼が節分の豆持ち来たる
銀貨落して白山の深雪かな

ちちははの桐の火鉢でありしかな
雪女の置いてゆきたる哺乳瓶
大寒の気圧配置のよろけ縞
冬帝のクリームシチュウに薄き膜
谷側へ重心を置き斜滑降
護摩の火に揺るる師の影父の影
毛衣をまとひ密印結びをる

三 春

近藤紀子

恵方よりおいでおいでをされてをる
初氷をさはつてをりぬ爪の先
傷つかぬふりをしてをり冬薔薇
唇に当つる氷の熱きかな
南無といふ猫が戀してゐるさうな
春障子の外黒竹のさやぎける
霾や瞬きしない人形の目
春水に藁くずの浮く日和なり
豆の灰汁をすくうてをりぬ春隣
転読に風の渦あり寒椿

槐安集

市場基巳

雨か雪かその前触れの風暗し
好き好きと言はねば鳩はうなづかず
土佐でいつも鯨に待たれつい遊ぶ
椎の実のゆくへ簡単には言へず
朴落葉夜な夜なひとり歩きもす

水野恒彦

はつゆめや覗いて見たる葎の髓
蓬萊やうしろに立ちし灰神楽
福助は常に坐しをり夜の雪
この鶺鴒くぐひしんから欲しきものにして
闇にして雪の速さを感じをり



石脇みはる

子祭や氷つてゐたる甕の水
ほつぺたに泡とんだる漁始
立春大吉鯉のえんがわなりしかな
春昼や藁と麴の匂ひして
啓蟄のうずをほどきし蚯蚓かな

竹内悦子

寒卵地球動きし音のして
夜の客石路の花びら散らしけり
待ちかねてまぢかねて初日の出かな
金婚の雑煮食しをる掛時計
あんぱんのあんこぼれゐる二日かな

木下野生

やや傾ぎゐてあたらしきカレンダー
牡丹雪もつれたる紐ほどきをり
冬帽子海を見にゆくとして被り
霜柱人の通らぬところなり
冬うらら親指小指くすりゆび

延広禎一

猩々の声あかあかと謠初
鯛の目をつるり舐めたり初戎
神鏡になにを眩く寒海鼠
かつぼれや寒九の水を飲み干せる
石路の葉に星の斑入りや初大師

栗栖恵通子

胸元に汚れありけり雪女郎
小寒の粒立つてをる言葉かな
きさらぎや薬包あかき反魂丹
こてこての漢来てはる小春かな
狐火やベッドが空になつてゐる

中島陽華

木菟鳴くや勘忍袋つぶれたり
刃加持受けたる朝の神樂獅子
ひもろぎや丸盆の上の雪兔
節分や奥歯ぼろりととれにける
ほろほろと延寿の一字鏡割

加藤みき

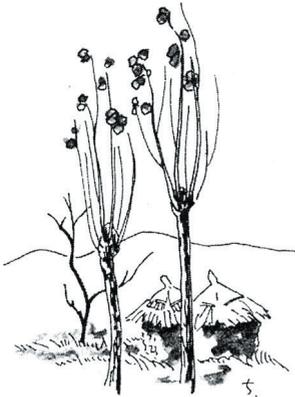
鶴のゆつくり歩く大枯野
鳥の嘴に魚はねてをり午祭
むらさきの闇に聞きしは幻狼よ
餅花を掲げし家に帰りたる
狛犬の眼窩瑠璃紺春浅し

大島翠木

初日裾を山に畳みて昇りゆく
笹鳴きへふりむきざまの女かな
はつゆめの右手左手ひらきたり
蜜柑山貫き電車海へ出る
寒牡丹たたまれてある車椅子

雨村敏子

海馬起きてをり元朝の潮かな
毘盧遮那や七種洗ふ水の音
黒豆を煮てをりふかふか雪の夜
闇汁の何を入れたる泡かな
緋蕪やつぎつぎ生るる星の渦



槐市集

植木戴子

蓮根のくびれの髭を削いでをる
槐の木と魔除けの玉と寒の水
寒昂 青竹の中覗きををる
立春の九曲橋を渡りをり
虎河豚の尻尾のぐいと動きをる

植松美根子

鶴亀と見たてし山や探梅す
前の日のとんどの灰にぬくみあり
渺々と咲きををる寒の桜かな
そこそこに話切りあぐ寒の入
いくたびも豆を煮てをり寒の内

宇田喜美栄

ひんがしはわたしの恵方海鳴す
波音の四方より聞こゆお元日
目薬や雪の景色を引き寄せて
野仏と日を分けあふて露の臺
山焼きの火が火を追うてをりにけり

大山里

初戎股間の餅を拾ひけり
冬銀河スプーンの音とボールペン
何もなき池にどんどの灰降るよ
冬花火戻らぬ人のありにけり
春よ来い腓の機嫌とつてます



槐集

高橋将夫選

星の渦つぎつき湧けり寒造 枚方

中野京子

除夜の鐘湯浴みの湯気の中までも

櫟の魂打つてゐる鼓かな

巽橋を渡る桃割れ風花す

寒満月餃子百個のゆであがり

夢の世のただただ温し初寝覚め

小さきものたましひよ風花になれ

跳ねゆけよ天の原へと雪うさぎ

呟きを聞かされてゐる海鼠かな

待春や吾より出でし鳥の声

何はともあれ元朝の五体かな

関伽桶に張りし氷を突きをり

碓^{しやこがい}礧貝の殻の分厚き寒満月

もろもろの命^{みこと}三寒四温かな

つくづくと唐蝶鮫や日脚伸ぶ

枚方

中野京子

普請場に活気ありたり寒さ中

底冷や童子姿の不動尊

外は雪如来の像のふくよかに

金縷梅や竹も地藏も風の中

石けりの声はずみをり福寿草

天地の白みくるなり大旦

四天王になべて朱樂の供物かな

春光や薬師如来の薬壺

天王山のちかぢかとあり寒鼻

夫の遺せし大いなる春子採る

光にも重さのありし若菜かな

元旦の地球を踏んでゐたるかな

冬原の魂とも見ゆる昼の月

人参を引きてのこりし穴穴穴

寒梅へ二歩寄り添ひし夕かな

枚方

谷村幸子

近藤きくえ

岩月優美子

岡崎

本多俊子

銀河往来 高橋将夫

〜ゆらぎ〜

◇自然界にはいろんな〈ゆらぎ〉がある。規則的な脈拍にさえゆらぎがあるという。不整脈の話ではない。健康な人が安静にしている状態でも、心拍間隔は平均値プラスマイナス10パーセントも変動があり、ゆらいでいるそうである。

〈ゆらぎ〉には次の3種類のパターンがある。

①まったくランダムなパターン（1/fゆらぎ）
でたためにピアノをひくような場合

②極めて規則正しいパターン（1/fゆらぎ）
メトロノームが音を刻むような場合

③ランダムでも、規則的でもないパターン（1/fゆらぎ）
木の年輪のように規則的なようで、不規則な場合

ところで、③の1/fゆらぎは、小川のせせらぎや、小鳥のさえずりや、ローソクの炎のゆらぎなどにみられ、人の心に安らぎを与えるといわれている。①は神経にさわり、②は退屈といえるかもしれない。

句集に並んだ句にもこの〈ゆらぎ〉があるのではないだろうか。そのゆらぎが1/fであるとき、読者は最も安らぎを感じるのかもしれない。

この〈ゆらぎ〉は真空の中にも存在し、その〈ゆらぎ〉から粒子が生まれるという。そして、脳波のゆらぎの中から何か新鮮な発想が生まれるかもしれない：なんて考えていると、なんだか俳句が湧いてくるような気がしてきませんか。

◇『かたばみ』（森田公司主宰）一月号より

現代俳句月評 森田清司

山頂の紅葉海辺の黄葉かな

高橋 将夫

山頂と海辺の対比が、実に率直に表現されている。大景を言うのに、あれもこれもあげたのでは、焦点がぼけて終う。焦点を両極化することで、大景を明らかにしている。

◇「槐集」観照

星の渦つぎつぎ湧けり寒造

中野 京子

新星が次々に生まれる宇宙と、寒中にふつふつと発酵する酒倉の空間が見事に照應している。

吹きを聞かされている海鼠かな 近藤 喜子

海鼠を見ていると何か呟いているように感じられる。本句では黙って聞き役にまわっている。俳諧。

もろもろの命^{みこと}三寒 四温かな 岩月優美子

様々な神々がいて、寒かったり暖かだったり：それが存在。

底冷や童子姿の不動尊 谷村 幸子

童子姿のお不動さん。底冷の中だと、なんともおしい。

夫の遺せし大いなる春子採る 近藤きくえ

夫の遺品ならいろいろあるだろうが、「大いなる春子」から夫への深い思いが伝わってくる。（以下略）